



	2025-23
監督・脚本：奥山和由	
原作：中村文則「火」(河出文庫『銃』収録)	
出演：瀧内公美	

👁️👁️ みどころ

『彼女の人生は間違いじゃない』(17年)、『火口のふたり』(19年)、『由宇子の天秤』(20年)と、近時、私が最も注目している女優・瀧内公美が一人芝居に挑戦！監督・脚本は、久しぶりにその名前を聞く、「自己解放、という言葉が頭の中に住み始めていた。」と述べる奥山知由(チーム奥山)だが、本作で見せる(魅せる)その切れ味は如何に？

舞台は一軒の洋館。以前に何回か訪れ診てもらったという精神科医院の中で、医師がいない中、約60分間も続く女の独白はどこまで「奇麗な、悪」を語り尽くすの？こりゃ必見！

中村文則の原作は『火 Hee』(16年)として桃井かおりの監督・脚本・主演で映画化されているそうだから、それとの対比ができれば最高だが・・・。

■□■奥山和由監督が本作に込めた思いは？原作は？■□■

本作の監督・脚本は奥山和由だが、その名前を聞くのは久しぶりだ。1954年生まれの奥山和由監督、そして“チーム奥山”の代表作は、『226』(89年)、『シネマ47』257頁)や『うなぎ』(97年)等々たくさんある。また、『RAMPO』(94年)で日本アカデミー賞優秀監督賞、脚本賞、他海外の映画賞を多数受賞でよく知られている。また、スクリーン・インターナショナル誌100周年記念号では、日本人で唯一、「世界の映画人100人」に選ばれている。

本作のパンフレットには、そんな彼が、「自己解放、という言葉が頭の中に住み始めていた。」とのタイトルの文章で本作に込めた思いを語っているので、これは必読！ここでは、20世紀を代表するフランスの映画監督イングマール・ベルイマンが、『晩年『A SPIRITUAL MATTER』という女優のひとり語りの脚本を仕上げ、映画化を熱望した。にも関わらず、

あまりにも突飛なコンセプト故に出資者が見つからず実現できなかった。」ことと対比して、「幸運なことに自分は中村文則の魅惑的言葉と瀧内公美の演技力に恵まれ、実現できた。」と、映画人としての最後の言葉を残している。そんな彼の本作に込めた“思い”をじっくりとかみしめたい。

他方、本作の原作は、芥川賞作家・中村文則の短編小説『火』。同作は『火 Hee』として桃井かおり監督・脚本・主演で映画化され、『業火』として三木美智代によって舞台化されているそうだから、今回の映画化は2度目だ。

同原作は、精神科医に語る女性のひとり語りで構成され、原文そのままのセリフとして声にすると約60分らしい。そんな原作を2回目の映画化するについて、奥田和由監督はいかなる脚本を書き、いかなる演出を？

■女優・瀧内公美に注目！■

私が女優・瀧内公美を初めてスクリーンで観たのは、『彼女の人生は間違いじゃない』（17年）（『シネマ40』272頁）。私はその評論で、「この女優はグッド！演技にも、脱ぎっぷりにも注目！」の見出しで詳しくその素晴らしさを紹介した。同作は、廣木隆一監督が自分自身の処女小説を映画にしたものだが、東日本大震災の津波で母親を失い、市役所に勤めながら仮設住宅で父親と2人暮らしをしながら、毎週末夜行バスで東京まで行き、英会話教室に通っていると嘘をついて、実は渋谷でデリヘル嬢をしているというヒロイン役を演じた女優・瀧内公美の印象は実に強烈だった。その後の瀧内公美の急成長は、①『火口のふたり』（19年）（『シネマ45』219頁）をみても、また『由宇子の天秤』（20年）（『シネマ50』176頁）をみても著しい。

本作のパンフレットに掲げられている。本作のストーリーは次のとおりだ。

ひとりの女が街の人混みのなかを歩く。まるで糸の切れた風船のように。
生きることも危うさを感じるその女は一件の館にたどり着く。
女は思い出す。以前に何回か訪ね訪でもらった精神科医院だ。
人の気配はないがドアは開く。
静けさが待ち受けている。医師は今でもどこかにいるのか？
女は部屋の空気に吸い込まれるように中に入っていく。
そして以前と同じように患者が座るリクライニングチェアに身を横たえる。
目の前にあるビュロの人形に見つめられているようだ。
「火の……火の話から始めることにします」
幼少の頃、カーテンに放った火で起こった事件から話し始める。
そして…「今日は、全部話す」と。

これを女優・瀧内公美の 78 分間の一人芝居だけでやるの？そんなことが本当に可能なの？誰もがそう思うはずだが・・・。

他方、本作のパンフレットには主演・瀧内公美の次のような文章（本作の鑑賞者へのメッセージ）があるので、それにも注目！

2022年6月28日、とても不思議な映画の企画が届きました。
ひとりの女性が延々と喋り続けている。
果たしてこれは映画として成立するのか？
突飛な企画過ぎるけど、ひとり芝居の経験がない私は
挑戦してみたいと思いました。
そしてこの女性はこれだけ喋り続けているけれど、
このひとが“言わないこと”、“言えないこと”ってなんだろう？
を探し続けることとなりました。
奥山監督をはじめ、スタッフの皆さんと大勝負に出た
この作品をどう受け取ってくださるのか楽しみにしています。

■□■舞台は？撮影は？美術は？音楽は？■□■

映画を語るについては、普通、第1にストーリー、第2に監督、脚本、そして俳優がテーマになるから、撮影や美術、音楽等はサブテーマになることが多い。しかし、本作については、監督・脚本の奥山和由と女優・瀧内公美と同じくらいの比重で、撮影は？美術は？音楽は？が大きなテーマになっている。それは、瀧内公美の一人芝居でストーリーを 78 分間も持たせるためには、撮影（技術）や照明、そして美術や音楽が重要な役割を果たすためだ。

本作の舞台は、一件の大きな洋館。これは主人公が以前に何回か訪ね、診てもらった精神科医院だ。冒頭、人の気配がないにもかかわらず、そのドアが開くのは、本来異様な風景だが、本作でそんなことを気にする人はいないはずだ。

そんな本作では、光の陰影を最大限活用した撮影技術と照明がお見事だから、それに注目！また、私は全然知らなかったが、美術については、劇中に登場する、絵画『真実』と画家の後藤又兵衛に注目！また、音楽については、2019年に日本人で初めてアメリカ・ニューヨーク市のカーネギーホールで口笛演奏を披露し、高い評価を得た加藤万里奈に注目！

■□■弁護士は必見！法科大学院の授業にも活用！■□■

本作は、舞台こそ女がかつて何回か訪ね診てもらった精神科医院だが、医師がいない中で一人芝居（独白）で構成されている。したがって、そこでは治療のための病状の説明はないが、冒頭に語られる“火の話”は「ひょっとしてこの女は放火犯？」と思わせる（確信させる？）ようなヤバイ内容だから、本来はその語りの1つ1つについて精神科医が受け止め、アドバイスすべきものだ。しかし、本作ではあえて精神科医がいないことを前提とする女の一人芝居にしているから、その独白の仕方（＝演技の仕方）は極めて難しい。間の取り方、移動の仕方、しゃべりの強弱やスピード等々、いくら奥山監督から、「瀧内さんの思った通りに演じていいですよ」と言われても、「自由にやれることほど難しいものはない。演出の領域に踏み込む怖さみたいなものを感じました」と瀧内が身震いしたのは当然だ。

しかして、そんな本作は人間のさまざまなトラブルを法的に解決することを職業とする弁護士にとって必見！また、法科大学院の教材にもピッタリだから、授業にも活用したい。なぜなら、本作の瀧内公美による一人芝居は、良くも悪くも、人間の（一人の女の）本質（本性）をさらけ出すものになっているからだ。弁護士や法科大学院の院生はそれを知って理解することが大切だし、そんな訓練をすれば、他の場面でも大いに役立つはずだ。

そんな視点からは、本作のタイトル『奇麗な、悪』も素晴らしい。日本のごく薄っぺらな常識（言い換えれば、朝日新聞的な常識？）によれば、「悪は悪いもの」だから『奇麗な、悪』などありえない、と単純に決めつけてしまいそうだが、現実にはそのような“不可解なもの”がたくさん存在しているはずだ。弁護士歴50年を経過した私は今、それを日々実感しているが、昨今の裁判所の実務の姿を見ていると・・・？

2025（令和7）年3月4日記